

日本における大黒天の変容について

切 旦

On the Transformation of Mahakara in Japan

QIE Dan

Daikokuten is commonly believed as a variation of Mahākāra originated from India. In Japan, it was integrated with Ōkuninushimikoto and became one of the Seven Lucky Gods. Many researches have been conducted regarding such transformation. Among the studies were Daikokuten no kenkyū by Miyazakiseturo and Daikokutenjinkō by Nakagawazenko. Daikokutenshinkō edited by Oozimakenhiko had listed quite sufficient evidences. Among the large volume studies, Iyanaganobumi had traced the details of the transformation of Daikokuten with the sophisticated research process in Daikokuten hen-shō. In China, although Daikokuten is among the protector deities of the Tibetan Buddhist monasteries, however it is quite rare to find the designated space of its rituals of offerings. Moreover, it is not listed among the Twenty Heavens, the common deities of Chinese Buddhist temples. Regarding this observation, we concur the research findings from Daikokuten genryū by Sawadamizuho for further investigation. In this essay, the primary discussion is regarding the transformation of Daikokuten faith in Japan, comparing with its variations and transformations in the regions of China.

Keyword: Daikokuten, Mahakala God, Zhao Gongming, Fortune God, Influence and Transformation

キーワード：大黒天、マハーカーラ神、趙公明、財神、影響と変容

はじめに

大黒天は、一般にインドのマハーカーラ神が変容したものとされる。そして日本においては、大国主神と融合し、七福神のひとつとされる「大黒さま」が形成された。その形成については、数多くの論考がある。古くは宮川節郎『大黒天の研究』、中川善教『大黒天神考』があり、さらに大島健彦編『大黒天信仰』には多くの論考を載せる¹⁾。なかでも大部の論として、弥永信美氏の『大黒天変相』は、複雑な過

1) 宮川節郎『大黒天の研究』(梶田従義1941年)、中川善教『大黒天神考』(親王院1964年)があり、さらに大島健彦編『大黒天信仰』(雄山閣出版1990年)など論考は多い。

程を経て大黒天が変容する過程を詳しく追う²⁾。そして、中国においては現在、大黒天はチベット系の寺院などでは姿が見られるものの、神像を祀っているところは少ない。現在中国の寺院でよく見られる二十諸天のなかにも入っていない。この点については澤田瑞穂氏の「黒神源流」を頼りに考察しなければならない³⁾。本論では、主として日本における大黒天信仰の変容について検討し、時に中国その他の地域と比較し、考察するものである。

一 大黒天の展開と変容

大黒天は一種の複合神であり、その性格は複雑である。長沼賢海氏は、次のような印象を語る。

大黒天神はもと印度の神になることは明白なることとなり。しかれども近代のわが大黒天はもはや印度の神にもあらず、支那のそれにもあらずして、実にわが日本の大黒天なり。しからば初めより大黒天は今日のごとき大黒天としてわが国にて信仰せられしかというに、さにあらず。大黒天神の歴史について、大概三つの時期を画すべし。第一期はすなわち印度支那の大黒天の形式並びに信仰を、そのまま我において継承せる時代にして、平安時代の頃とす。鎌倉時代において徐々わが国風に化し、室町時代に入りて、まったく我が国の大黒天となり終れり⁴⁾。

すなわちこれによれば、平安時代にはインドや中国における大黒天の性格をそのまま引き継いでいた。しかし、鎌倉時代には徐々に変化し、室町時代には、まったく別の神格に変化したというのである。

また同様に、渡邊恵進氏は「比叡山の大黒天信仰」で、「大黒さまはインドで誕生され、中国に渡り日本の国に来られた神さまで、衣食住を授ける福の神さまなのです⁵⁾」と述べる。

また一方で、大黒天が主に福の神であることについて、宮川節郎氏は「大黒天は福德円満、授宝寿、殖産勤勞の神であると云はれ、大黒天像を拝する何人も然る所以を察知せられるのである⁶⁾」と述べる。また宮崎英修氏によれば、次の通りである。

大黒天は現在われわれが知っているような形相になったのは鎌倉時の末から室町期にかけてその先駆があらわれはじめ、室町時代に入って民族信仰となって大国主命と結びつき、夷神と関連し一般に普及されるに従ってあの福相となり、左手に袋、右に槌を持ち米俵に乗った姿となったのである⁷⁾。

2) 弥永信美『大黒天変相』(法蔵館2002年)

3) 澤田瑞穂「黒神源流」(『中国の民間信仰』工作舎1982年) 104-116頁。

4) 長沼賢海「大黒考」(『福神信仰』雄山閣出版1987年) 209頁。

5) 渡邊恵進「比叡山の大黒天信仰」(宮田登編『七福神信仰事典』戎光祥出版株式会社1998年) 15頁。

6) 宮川節郎『大黒天の研究』(宇治村梶田從義1941年) 2頁。

7) 宮崎英修「大黒天の形容の變遷」(『日蓮宗の守護神』平楽寺書店1958年) 162頁。

恵比寿と大黒について、喜田貞吉氏は次のように述べる。

大黒と夷とは本来全然性質系統を異にした神であった。前者は印度の神で、後者は日本の神。前者は少なくとも平安朝の初期から伝来して、広く各地の仏寺に祭られた神、後者は恐らく平安朝も中頃以後から流行り出して、もと摂津の西ノ宮を元祖とした神。前者は主として食物庖厨を守るものとして祭られた神、後者は主として漁業航海を守るものとして祭られた神⁸⁾。

インド伝来の大黒と、生粋の日本の神である恵比寿は、そもそも性格も異なっている。恵比寿信仰は平安朝以降に流行し、摂津の西宮を主とするものである。恵比寿は漁業航海の守護神であり、大黒とは性格も異なる。恵比寿も大黒も、様々な信仰と混合しながら発展したことについて、大護八郎氏は次のように述べる。

恵比寿・大黒ともにその発生には日本在来のかみと印度の土俗神や仏教の天部像が習合してその発展過程は複雑多岐である。これが近世以降民間信仰と再び習合して、福神的要素とともに農村や漁村においてはさらに別の発展をとげて今日にいたっているのである⁹⁾。

さらに中川善教氏はまた次のように結論づけている。

吸収融合とは云いながら、そこにはおのづから限界もあり、可能と不可能の問題もあって、全く同じ根に発生も全然異にしながら何時の間に合一してしまうもの等、さまざまである。その中で民族信仰に於ける大黒天の如く、彼我の神格の完全に溶融習合し去った神も珍しかろう。それはしかし両者の溶融習合というよりは、むしろ混雑紛乱というべき性質のもかも知れぬ。その福神としての性格は、印度の大黒天神が厨の神として祭られたことに由来するであろうが、大己貴神即ち大国主命と混乱は、その大黒と大国の音通に基づくものであることとは、異論の無いところであろう。その混乱が何時頃成立したかということは容易に知ることはできないが、忽ちそれをするものの出来難い程に根強く、両者の習合は全く一体化し民族化し終っているのである。

また宮川節郎氏は「大黒は大国に通じ、大己貴にも通じるので、今日では大黒天神即ち大国主神と云ふ風に一般に同じ神であると信じられるに致ったので、又、何ちらの神も農耕殖産健康授福など同じ御才能があるので、大国主命は大黒さんであると成ってしまったのである。」¹⁰⁾とあり、宮田登氏もまた「実に大黒天が福神として民衆に接し得たのは、大黒と大国主命の出雲信仰との習合、混同にあったのであ

8) 喜田貞吉「大黒・夷二神並祀の由来」(前掲『福神信仰』雄山閣出版に所収)

9) 大護八郎「福神」(『大黒天信仰』所収) 143頁。

10) 前掲 宮川節郎『大黒天の研究』11頁。

る。』¹¹⁾と述べる。

すなわち、現在広く知られている大黒天の像は、大国主命と融合したものである。これが「だいこく」という発音の類似によるものであることは指摘されている通りである。

二 大黒天の神像の変遷

一方で、大黒天については様々な神像が残されている。マハーカーラ神からの変容については、弥永信美氏が次のように述べる。

さて、このように誰にも知られ、親しまれている大黒天が、古来、日本の密教では恐ろしい像容をもって描かれていることを知っている人は、それほど多くはないかもしれない。たとえば、もっとも普及した現図胎蔵曼荼羅の図像（じつは日本ではこれ以外の大黒天の忿怒相の像容はほとんど存在しない）では、大黒天は摩訶迦羅という名で知られ、三面六臂、前の二手では剣を横たえ、次の手は、右に小さな人間を髪つかんで持ち、左に山羊の角をつかみ、後ろの二手は、左右で象の皮を被るように広げている。曼荼羅の数々の忿怒相の諸尊のなかでも、これほど恐ろしい形相の尊像は多くはない。「おめでた尽し」の福の神・大黒天が、一方ではこの恐るべき忿怒の形相の摩訶迦羅天と「同じ神」であるとは、いったいどうしたことなのだろう。（略）つまり大黒天とは、本来、ヒンドゥー教のシヴァ神の眷属であったのが仏教の守護神とされ、さらに厨房の神から日本では福の神として信仰されるようになった、というふうに要約することができるだろう¹²⁾。

しかし、その源流であるマハーカーラ神は、ヒンドゥー教のなかではそれほど一般的な存在ではないという。弥永氏は次のように述べる。

しかし、ヒンドゥー教におけるマハーカーラは、一般に「絶対的時間」という哲学的なコンテキストでは重要な意味をもつが、神話的存在としては、インド神話や図像に関する比較的詳しい書物を見ても、これ以上の情報はほとんど見当たらない。どう見ても、マハーカーラはヒンドゥー教のなかで（たとえば日本における大黒天に匹敵するような）ポピュラーな存在とは考えられないのである¹³⁾。

すなわち、マハーカーラ神はインドよりも、他地域で特に信仰が発展したものとされるのである。

さて、弥永氏の分析によれば、日本に伝来した大黒天には、四種の姿があるという¹⁴⁾。ひとつ目は先に

11) 宮田登『近世の流行神』（評論社1972年）107頁。

12) 前掲弥永信美『大黒天変相』74-76頁。

13) 前掲弥永信美『大黒天変相』80頁。

14) 前掲弥永信美『大黒天変相』300-301頁

見たような曼荼羅に見える忿怒相としての大黒で、これは流布することが少なかったようである。二つ目は、天台系の寺院に見られるもので、武神の装束を身につけ、左手に宝棒、右手に金袋を持つ像である。これは義浄の『南海寄帰伝』に基づいたものと考えられるという。



金剛輪寺の大黒天像¹⁵⁾

『南海寄帰伝』の記録によれば、西方の各寺院に摩訶迦羅と呼ぶ大黒天が食厨の柱の側、あるいは大庫門の前に木を彫って置くとある。

ただ、この像容も一般的なものとはなかったようである。三つ目の像は、袋を背負った平服の立像である。これが現在、日本での大黒天の一般的な像といえるもので、広く流布している。しかし、この像自体も大きく変化している。

九州太宰府にある観世音寺には、平安期の大黒天の像が所蔵されている。この像の大黒は瘦身であり、かなり厳しい表情をしている。

15) 「天台宗金剛輪寺」サイトより <http://kongourinji.jp/news/index.php?nid=25>



太宰府観世音寺の大黒天¹⁶⁾

この像も、一般にイメージされる大黒天の像とかなり異なっている。のちの時代になると、笑顔で槌を持ち、ふくよかな姿をした像容に変化していくようである。

四つ目は、「三面大黒」と呼ばれるものである。これは三面であり、正面が大黒天、脇の二面が毘沙門天と弁財天であるというものである。これは見ようによっては単なる福の神の合体像に思われるのであるが、実際には複雑な背景を持つ像でもある。

特に三面大黒に注意し、『三面大黒天信仰』を書かれたのが三浦あかね氏である¹⁷⁾。三浦氏によれば、現在のような三面大黒が流行したのは、室町期以降であるという。

従来、寺院にのみ祀られていた三面大黒天が、鎌倉時代から室町時代にわたって、人々に篤い信仰をもたらした。特に比叡山の三面大黒天が京都を中心として大流行した。従来、怖い顔をしていたはずの三面大黒天も、いつしか柔和な親しみやすい面相、あるいは普通の表情に変わってきている。荷葉すなわち蓮の葉の上に立っていた木像も、俵の上に載せられるようになってきた。(略) このように、室町時代には三面大黒天の存在は、庶民層まで広く知られるようになった。大黒天信仰が室町時代は、比叡山の各院の食厨に大黒天像が祀られ、修行僧たちの生活を維持してくれる神として崇敬された。このような信仰や思想が比叡山から京都の人々に受け入れられて、三面大黒天はやがて全国各地に広まっていったと思われる¹⁸⁾。

この後、江戸時代にさらに大黒天が流行し、様々な種類の大黒天像が造られたことについて、三浦氏は江戸期の『仏像図彙』を引いて説明する¹⁹⁾。それによれば、大黒は六種の姿があり、変化に富んでい

16) 太宰府市「市内の指定文化財」サイト (<http://www.city.dazaifu.lg.jp/bunkazai/shinaibunkazai/shiteibunkazai/6026.html>)

17) 三浦あかね『三面大黒天信仰』(雄山閣2016年)

18) 前掲三浦あかね『三面大黒天信仰』74-75頁。

19) 前掲三浦あかね『三面大黒天信仰』83頁。

る。

この六種大黒については、中川善教『大黒天神考』にもその姿が掲げられている。すなわち、摩訶迦羅大黒、比丘大黒、王子迦羅大黒、夜叉大黒、摩訶迦羅大黒女、信陀大黒の六種である。



六種大黒²⁰⁾

中川氏はこの六種大黒について、次のように述べている。

観ぜよ、壇上にマ字有り、変じて宮殿と成る。其の中に宝盤有り、盤の上にハ字有り、変じて荷葉座と成る。座の上にカ字有り、変じて袋・俵・槌・釵・輪宝・宝珠と成る。次での如く六宝変じて六大黒天神と成る。第一の男天大黒天神摩訶伽羅天と名づく青黒色にして首冠に鳥帽子有り、其の中に蟠の白蛇頂上に如意宝珠を戴く。装束は袴を着け、右の手は拳に作しに右腰を押し、左の手に袋を持ち背より肩の上に懸け、毎時拭細して黒色を形とす。第二の女天大黒天神摩訶伽羅延女と名づく黒色にして天女の如く、俵を戴き、左右の手に俵を抱き、青衣を着す。第三の比丘大黒天神第一王子黒色の僧形なり。墨染の袴を着し、左の手に杖を築き、右の手に槌を持つ。第四に夜叉大黒天第二王子黒色の官俗なり。赤衣を着し、釵を持つ。第五に伽羅大黒天神第三王子黒色の官俗なり。青衣を着し、左右の手に輪宝を捧ぐ。第六に信施大黒天神第四王子黒色童子なり。白衣を着す。右の手に如意宝珠を持し、左の拳は腰に安ず。

すなわちこれによれば、男女の大黒に第一から第四までの王子が加わったのが六種大黒である。その様子は、むしろ牛頭天王と八王子の姿に似ているかもしれない。

三面大黒天については、弥永氏はむしろ兜跋毘沙門天との共通性を指摘する。弥永氏は、『大黒天神

20) 前掲中川善教『大黒天神考』69頁。

法』を分析したあとで、次のように述べる。

いまでも見たとおり、『大黒天神法』の冒頭に言う「大黒天神は堅牢地神の化身なり」という「有る人」の説は、ほぼ確実に『慧琳音義』の、摩訶迦羅天の足の下に「一地神女天」があり、両手でその足を支えている、という記述に基づいて発想されたものと考えられる。ところで、仏教の他の神像を探していくと、これとちょうど同じように大地女神の両手の上に支えられた有名な神像があることに気付く。それがいわゆる「兜跋毘沙門天」である²¹⁾。

兜跋毘沙門天は、京都の東寺に所蔵されるものが有名で、日本の各地に同様の像がある。四天王は各自で仏殿に配されるものであるが、毘沙門天については単独の像も多い。そして単独の場合によく見られるのが、この兜跋毘沙門天である。兜跋毘沙門天は宝塔と戟を持ち、長身瘦躯の像で、足下は女神や鬼が支えている。



京都青蓮院兜跋毘沙門天像²²⁾

なお、兜跋毘沙門天は長らく日本特有の像であるとされていたが、中国の四川の石刻仏のなかには類似の像も存在する。

21) 前掲弥永信美『大黒天変相』355頁。

22) 読売テレビ「快慶展」サイトより

<http://www.ytv.co.jp/kaikei/exhibition/display/detail/chapter5-2.html>



夹江千仏岩134窟毘沙門天立像²³⁾

さて弥永氏は、さらに踏みつけられる神の名が「歓喜天」であり、「夜叉鬼」であるとの別の伝承をも持ち出す。そして、この姿が歓喜天であるガネーシャ神、鬼子母神ハーリーティーと関係が深いことについて指摘していく²⁴⁾。また、毘沙門天クペーラ神と、大黒天マハーカーラとの関連が深いことについて考察を重ねる。

いまその説の当否を論ずるすべを持っていないが、チベット密教においては、これらの神々とマハーカーラの関係は深いと言えらる。

チベットにおけるマハーカーラであるコンポは、毘沙門天や吉祥天と関係が深い。またコンポが踏みつける神として、ガネーシャ神がある。さらにコンポとダーキニーがともに描かれることもある。おそらく、兜跋毘沙門像においても、このような複雑な信仰の組み合わせが背景になっているものと推察される。何らかの伝承があるもので、恣意的に描かれたものではないであろう。

三 財神趙公明と大黒

これらとは別に、王安泉氏は中国の財神である趙公明が、日本の大黒天に影響を与えていると説いた。その主張は以下の通りである。

インド仏教の財神である大黒天（マハーカーラ）は、漢代に中国に伝えられ、漢伝仏教、チベット仏教、南伝仏教の全てに登場している。元代には、モンゴル仏教において財神・大黒天への信仰が盛んになった。唐代の頃には、財神・大黒天と正財神・趙公明が日本に伝わり、日本の民衆から深い尊崇と敬慕を受けるようになった。財神・大黒天は正財神・趙公明の文化的要素に溶け込み、七福神の筆頭として信仰されている。中国の正財神・趙公明にまつわる文化は、日本の財神・大黒天

23) 「毘沙門天の世界」サイト (<http://bishamonten.info/menu.html>) より

24) 前掲弥永信美『大黒天変相』358-359頁。

にまつわる文化に強い影響を与えた。中国の民衆が敬慕する正財神・趙公明と日本の七福神の中の財神・大黒天は、本源的で深い文化的起源と奥深い歴史的背景を持っている²⁵⁾。

はたして、日本の大黒天に趙公明神の影響があるのでしょうか。

まず趙公明の性格について考えてみたい。確かに、趙公明は財神で、福の神である大黒と共通するところがある。王氏はまた趙公明について次のように述べる。

正財神・趙公明は名を朗、字を公明といい、宋の真宗により聖祖に封じられた。道教では金龍如意正一龍虎玄壇真君に封じられ、招宝天尊・蕭昇、納珍天尊・曹宝、招財使者・鄧九公、利市仙官・姚少司を率い、開運招福と商売繁盛を専ら司っている。中国道教の膨大な神仙の系譜の中でも、正財神・趙公明は際立って重要な位置付けにある。中国の財神には正副の区分があり、偏財神や准財神の別があるが、趙公明は常に正財神として敬われてきた。財神には文武の区分もあり、趙公明は第一武財神である。また、五路財神の統率者としての一面も持つ。さらに、五方財神の中では中央に位置付けられ、四方の財神を統率している。正財神・趙公明の故地である陝西省西安市では、明の万暦9年（1581年）に修築された財神廟が、財神文化を受け継いでいる。2011年には、約530ムー（約35ヘクタール）に及ぶ趙公明財神文化景区が建設され、財神の故地を整備するとともに数々の財神伝説を収集・整理し、正財神・趙公明を祀っている²⁶⁾。

『三教搜神大全』などに見える趙公明の姿は、黒い顔、黒い虎にまたがり、鞭を執り、武神としての形象をとっている。



趙公明神像²⁷⁾

25) 王安泉「从中国财神赵公明到日本国财神大黒天—探索中日财神文化的历史渊源—」（愛知大学中日大辞典編纂所『日中語彙研究』第5号2015年）100頁。原文は中国語、ここは要約に拠っている。

26) 前掲王安泉「从中国财神赵公明到日本国财神大黒天—探索中日财神文化的历史渊源—」99-100頁。

27) 「神炉」サイトより（https://www.shenlu.com.tw/news_detail/29.htm）

澤田瑞穂氏は「黒神源流」で次のように述べる。

財福を授ける神として、特に商家で玄壇趙元帥として奉祀せられる黒面鬚鬚の神、名は公明、その普及のわりには素性由来とも不明な神である。黒面の財神という際だった特徴をもつが、趙元帥・趙玄壇・趙玄朗・趙公明など、名称の上でも数種の伝承が縋いまぜになっていて、その端緒を見つけることが困難になっているのである²⁸⁾。

しかしこの趙公明の源流が、インドのマハーカーラ、すなわち大黒天にあるのではないかと澤田氏は述べていく。これは蓋然性の高い話であると考ええる。

その黒面は、あるいは趙玄壇や蜀地の壇羅公とも相通ずるほか、はるかにインドやチベットのマハーカーラすなわち大黒天の信仰にもつながるものではあるまいか。中国民間信仰の神々は、そのすべてを歴代の『文献通考』や『礼部則例』の記載だけに根拠を求めることは不可能だからである²⁹⁾。

澤田氏は、大黒天に財神の性格が見えないことを、その論拠の不確かさのひとつとして挙げている。しかし、これもチベット密教のマハーカーラである白コンポから考えれば、問題はないと考える。すなわち、チベット密教で祭祀される白コンポは、財神であり、かつライオンに乗る姿が知られているのである。むしろこれはマハーカーラのバリエーションのひとつであるが、趙公明の姿の源流となりうるものである。そのため、大黒天から趙公明への影響については、十分に肯定できるものと考ええる。

さて、王氏の論のひとつが、趙公明信仰が日本の大黒信仰に影響を与えた可能性があるかということである。これに関しては問題があると言わねばならない。大黒天は大黒として日本に伝来し、日本で独自の発展を遂げたが、そこに趙公明の影響は見いだしがたいのである。

まず王氏自身の論より、趙公明の性格の変遷について見てみたい³⁰⁾。王氏は、六朝期の『搜神記』『搜神後記』『真誥』などを参照し、そこに出現する趙公明が瘟神であることを示す。次に明代の『三教搜神大全』や『封神演義』の記載を見るが、そこでようやく、趙公明が財神であることが示される。

すなわち、六朝期から唐代にかけては、趙公明は瘟神であり、恐ろしい疫病を振りまく悪鬼として恐れられていたのである。その後、元から明にかけて、財神の性格が強まっていく。

日本の大黒天については、先に見た通り、平安時代には日本に伝来し、その後、恵比寿や大国主との習合の結果、姿も性格も変容していった。

趙公明も、瘟神から財神に性格が変わっていくが、これはむしろ大黒天の影響と考えるほうがよいと考える。仮に平安期の日本に伝来していたとしても、唐代の、単に瘟神としての信仰が伝わっただけであろう。

28) 前掲澤田瑞穂「黒神源流」104頁。

29) 前掲澤田瑞穂「黒神源流」116頁。

30) 前掲王安泉「从中国财神赵公明到日本国财神大黒天一探索中日财神文化的历史渊源一」102-105頁。

つまりそれほど複雑な伝来を想定する必要はなく、インドのマハーカーラは日本に伝来して、ダイコクの神となり、中国では趙公明に影響を与えて、やはり財神となったというだけのことである。すなわち、日本の大黒も中国の趙公明も、ともにインドのマハーカーラを源流とするものなのである。そして、日本の大黒天と中国の趙公明の間には、影響関係はほとんどないと考えられる。

おわりに

これまで、本論では日本における大黒天の変遷を中心に述べた。

福神として信仰される現在の大黒天の姿は、ヒンドゥー教のマハーカーラ神とはかなり異なった形となった。

また中国の大黒天とも相違しており、基本的に恵比寿や大国主との接触と変容、融合を重ねてなど新たな神格になったと考えられる。日本国内で神仏が習合したことがその変容の根幹にあると考えられる。ただ、他のヒンドゥーの神に比べても、かなり大きな変容を経たものだと思われる。

さらに、中国における財神の趙公明との関連についても検討した。

中国人研究者の一部では、そもそも趙公明が日本の大黒天に影響を与えたと論ずる者もあった。しかし、六朝から唐代にかけては、趙公明は瘟神であり、財神ではない。もしこの時期の趙公明の影響があるなら、大黒天は疫病神と性格を持っていないなければならない。そのため、趙公明から日本の大黒天への影響は、ほとんどないものと見なして構わない。すなわち、マハーカーラ神は、中国では趙公明に、日本では大黒となって変容し、それぞれに信仰が発展していったものと考えられる。

これらの問題を考えるうえで、三面大黒天の形象についてさらに論ずるべきであると考えが、これについては毘沙門天との関係もあり、さらに複雑な影響関係があると想定されるので、また別に論じた。